

陸軍航空

沖縄より台湾へ、

ここで助かった

少年飛行整備兵

香川県 長尾 健次郎

私は、昭和二（一九二七）年三月二十五日、香川県綾歌郡綾南町陶で生まれました。小学校を卒業するとすぐに、坂出市の飲料水製造の商店へ奉公に出されました。

昭和十七年、十五歳になり陸軍少年飛行兵に志願し、見事合格し、これぞ男子の本懐、いざ国難におもむかんと、万歳、万歳と歓呼の声に送られて、坂出―高松―岡山―大津へと汽車で胸をふく

らませて勇んで行きました。

昭和十七年十月一日、滋賀県大津陸軍少年飛行兵学校へ入校し軍人生活の第一歩に入りました。私達は少年飛行兵の第十五期生で、大津学校の第一期でした。人員は一個中隊二百五十人で、四個中隊編成でした。十五歳、十六歳、十七歳と三年にわたる少年兵でした。学校内の躰は厳しかったです。基本教育は歩兵の新兵教育と同じ、軍事教練をみっちり受けました。班長の愛のビンタは激しく、少年兵同志はお互いに励まし合って、「何くそ、頑張れ」と気合を入れました。

半年経つと第十六期生が入校してきました。その頃になると一年先輩となったことを思い、誇りと責任を持ちました。間もなく適性検査を受け分

類されて四コースに分かれて行きました。

- 1 九州福岡県の大刀洗 戦闘機の操縦
- 2 関東茨城県の水戸 通信
- 3 関東埼玉県の熊谷 爆撃機
- 4 関東埼玉県の所沢 整備

昭和十八年九月三十日、埼玉県所沢の陸軍航空整備学校へ入校。入校後二週間は兵隊としての基礎の復習でした。いよいよ本番の整備作業です。航空教育隊であるから、その作業は特業と言ったのです。

最初、私は旋回機銃を整備する中隊へ入ったのですが、間もなく発動機の整備中隊へ廻されました。この発動機整備中隊の兵は機関工手と呼ばれていました。

旋回機銃の中隊にいたとき、中隊長殿は自分の中隊のことを「いかによく飛行機が飛んでも、いざ空中戦となると、お前たちの整備した機関銃が

不完全では何もならぬ。実に我が中隊は、我が空軍にとつて重大な使命を持つものである」と訓示されました。そして、「旋回機銃は、プロペラの回転している隙間から弾丸が出るのである。もし整備がちよつとでも間違ったら自分で自分のプロペラを撃つのだ」とも言われた。

私が発動機整備の中隊へ廻ると、この中隊長殿は「発動機整備の任務は実に重い。いざ空中戦となり、発動機の調子が悪いと搭乗員は思うままの働きができず、遂には敵に制空権を握られてしまうのだ。だから発動機を整備するものこそ我が空軍の花形である」と言われた。どちらも、もつともな話で、理屈のつけ方もあったものである。

さて、私はこの花形の機関工手となりましたが、さっぱりエンジンの事は分からない。地方にいたとき機関車の缶焚きをしていた私は、機関に關係があつたからという理由で、この花形部門に廻されたのであろうが、同じ機関でも機関車と飛行機では内燃と外燃と最初から違う。一方は無軌道な

空を飛び、片や地上のレールの上を走るもので、ここに根本的に違う点があるのです。

この中隊には元、飛行機の製作会社にいた者が断然多く、従ってエンジンのこと、機体の事、何でも詳しいのに私は何もわかりませんでした。

大きい建物の発動機工場には、古い発動機が沢山並べて据えてありました。私は初めて見る発動機というものの、ナットを外したり、締め付けたり、割ピンを入れたり、ナット同志を黄銅線で結び廻り止めをしたり、このような作業を何日かやりました。

作業に行く時は、銃も剣も持って出て、時々は射撃の練習もしました。

私達の専攻は百式司令部偵察機といい、一名を「新司偵」とも言いました。一冊宛の特業ノートを支給され、極秘の朱印が捺してあり、学科時はこれに新司偵の全長、全幅、その他の仕様など重要なことを記入しました。

だんだんと少年兵の間に成績の良い者と劣って

いる者との序列ができて来ました。「オイチニ、オイチニ」の方はともかくとして、私は劣の部類に属しました。

しかし一番愉快であったのは、ある日、整備作業の途中で班長どのが「何故、発動機に滑油を給するか」と質問された。手をあげた者は四人か五人いました。劣等兵の私もこれは知っていたので勢いよく手をあげました。皆の眼が私に集中しました。班長殿も普段手のあがったことのない私の手が今日があがったので意外に思ったらしく、他の手をあげている者をおいて私に「おー、長尾言うて見い」と。

私は大声で答えました。

「ハイッ、それは金属と金属が互いに摺動する時は、いかに精巧に製造されていても多少の凸凹があります。そのため摩擦により熱を生じ、あるいは摩擦を助長し、甚だしい時は焦損するに至るのでこの部分に給油して油膜を作り、直接、金属同志の摺動を防ぎます。終わり」と言いました。

班長殿は「ウーン、ヨーシ。皆、長尾の言った通りだ。よく覚えておけ」と言われました。私は班長殿に初めて褒められたのです。

日中、営庭へ黒板や腰掛けを出しての学科がありました。天気の良い日、ポカポカと暖かい日は最初は緊張していても、ついウトウトとします。目は次第に上瞼と下瞼がくっついてしまう。長い竹を持った古兵どのが後から頭を思いきり小突く。ハツとして目を皿のようにしてまた講義を聞くのですが、さあ大変、日中はそのままどうにか過ぎても、日夕点呼後、班長殿が下士官室へ帰られると、古兵殿が待つてましたとばかり「待て、今日の学科の時、居眠りをした者は残れ。あとは解散」。そして残された連中は、ビンタの四つ五つを見舞われました。

所沢の学校の学業期間は二年でしたが、戦争のため短縮されて早く卒業しました。

昭和十九年八月末、大阪航空廠、誠一九〇一七部隊第一四五独立整備隊に編成されました。

昭和十九年九月上旬、門司港より「大博丸」に乗船、出港。四十数隻の大船団でした。私達はこの大船団を見て絶対不敗を信じ、血湧き肉躍ったものです。

船内は非常に暑いので、他の部隊と交替で甲板へ出してくれました。港を出てから既に数日、海空よりの掩護のもと南下しました。日本の暑さもさることながら、沖繩へ近づくと暑さは一層きびしい。南国の有難さはスコールです。ザーツとくと、私達は急いで飯盒を甲板へ並べ、雨水がたまると水筒へ入れるのです。

船団は、一度沖繩本島へ降り、本島へ下船する部隊を降ろしました。我が部隊も下船しましたが、翌日また乗船の命令が出て、再び船団は出発しました。どこまで行くのかと思っていると、宮古島の平良港へ上陸しました。

久しぶりに踏む南国の土。小さいけれどもバナ

ナもあります。見渡す限り青々としているのは砂糖黍畑です。吹く風もそよそよと甘酸っぱい匂いがします。

粗末な国民学校の校舎を一時の兵舎として入った私達は、いよいよこの島で作戦に従事することとなったのです。

けれども飛行場はあっても飛んで来る飛行機がないので整備作業にならず、主として戦闘訓練と整備教育に明け暮れました。

部隊は将校下士官の下に、少年飛行兵学校出身の者が十人ほどいました。この少年たちは本当に紅顔の若者であるがその進級は早く、あつと言う間に兵長になりました。その下に現役兵十人、あとは召集兵で、妻子もある相当の年配の者もいました。気候に馴れぬのと疲労や給与の悪さなどにより、ついに病に倒れ、中には死んで行く者もいました。夕方になると小高い丘へ集合させられ、遙かな海と空を眺めながら軍歌演習をやらされました。歌は「加藤隼戦闘隊」が主でした。

飛行機の整備が本職であるのに、戦局の終焉が近いのか飛行機が来ないため、毎日訓練と掩体壕掘り、内務実施、炊事の使役などに日を過ごしていました。

昭和十九年十二月頃「どうも我が部隊は台湾へ行くらしい」との噂が立ちました。私達は喜びました。宮古島の三カ月、四カ月の生活がもう何年ものように思われました。

昭和十九年十二月、部隊長以下約八十人が先発隊として海軍の船で出発。残りの約百人は十二月の末、夜にまぎれて平良の港を出港しました。ようやく台中市に至り、先発隊、後発隊合流して台中飛行場において整備作業に当たりました。

市の中央に台中公園があり、巨木が空を覆っているのです。下に飛行機を運び整備をしました。午前九時か十時頃になると毎日敵機がやってくる。警報が入ると木の枝や菰を被せて機体を覆い、帯剣と鉄帽だけを持って待避しました。鉄帽の中には下給品の煙草（「つわもの」と名のついた十本

入り)が入っている。民家へ行ってそれを出すと大きなバナナの一房と交換してくれました。

我が部隊は特攻隊用の飛行機も数機整備しました。敵の目を欺くために胴体と翼の目の丸を消しました。整備のなつた機へ紅顔の特攻隊員は従容として乗り込み、砂塵をまいて潔く飛び立ちました。私達は手にかけて飛行機を、もう還つて来ない飛行機を、若い特攻隊員を感無量の思いで見送つたものです。私もちやうどその場に居合わせて、「帽振れ」で帽子をちぎれるように振り、自然と涙がとめどなく流れました。特攻隊員はサツと挙手の敬礼のまま飛び立ってゆく。戦後約六十年の現代でも、思い起こして胸がつぶれ、涙が止まりません。前途ある有能な若い勇士を何回も沖繩へ見送つたことでしょう。

かくて戦いは我に利あらず、遂に昭和二十八年八月十五日、終戦を迎えたのです。

終戦時、台湾には約二十五万人の日本軍がいたと聞きます。それはほとんど無傷であった。気候は良いし、食べる物も豊富とあって、内地への引き揚げは最後になると聞かされていました。その引き揚げの日まで、これだけの集団で生活することは許されないので、各人それぞれ方法を考えるように言われました。

台中市内の老松町に製糸会社の倉庫があり、我が部隊の糧秣庫になっていました。その監視を命ぜられました。その監視とは倉庫の入口に乾燥野菜(中味は馬鈴薯)の箱を積んで、その上に夜は寝ていればよかったです。食事は毎食部隊から届けてくれ、この勤務は私にとって天の恵でした。

終戦と共に、台湾人の対日感情も悪化して、特にヤーサンの部類は変に威張りくさって、日本人のビンタを取ったり、必要以上の暴力を振るったりしましたが、日本人はただ忍従するしかなかったのです。また蒋介石軍の一部も兵器、被服の押

収をはかり、一時は戦闘場面の発生も危ぶまれたこともあったとか聞いています。とにかく何とか大事に至らず、帰国の日を迎え、昭和二十一年二月アメリカのリバティ―船で広島県大竹港へ上陸、復員しました。夜行列車で四国へ、高松へ上陸、帰宅しました。

最後に私が兵役についた当時の我が家の状況は次の通りでした。

父 死亡 東京で鼈甲の職人

母 健在 無職

父は早く死亡し、母は私が六歳の時に再婚して弟二人、妹三人を生みました。

昭和二十四年私は長尾家と縁があつて、養子に入りました。私は十九歳で敗戦となり現在七十七歳です。子供は男ばかり三人。孫は男三人、女一人。曾孫は二人。男一人、女一人。皆元気です。

戦後の私の生活は、農家では現金収入がないの

で、土方や左官の手伝いをやり、タクシーの運転手も十年やりました。ゴルフ場のコースの管理も七十二歳までやり、またスレート工場でスレート運搬用のリフトの運転も十三年やりました。

同年兵の天津以来の少年飛行兵の同期の戦友三人（すべて四国在住）が、皆元気で毎年数回会合をして昔話に花を咲かせ、現在の幸福を感謝し、若くして散った不運の戦友の御霊に冥福を祈って黙祷を捧げています。